「でも、良い事があったなら、良かったね。出来れば、いつか聞かせてね」
「はい。いつか、そんな時が来れば」
小学校から帰宅し、私の変化に気付いたらしい一つ年上の少女――やみひめさんと、そんな言葉を交わした。
私は表情が一定で、よくポーカーフェイスと言われる。それなのにも関わらず、やみひめさんに『何か良い事でもあったの？』と訊(き)かれたのには驚いた。やみひめさんが鋭いのか、傍目(はため)にも判るくらい気持ちが表情に出てしまっていたのか、それは判らない。
ただ、『良い事』があったのは事実で、だけど、それを話す事は躊躇(ためら)われた。相手がやみひめさんであれば、尚更(なおさら)話せない。
話せば嫌われてしまうかもしれない。
距離を置かれてしまうかもしれない。

――違う。
それは言い訳だ。

やみひめさんは、そんな事で私に対する態度を変えたりしないと思う。そんな風に考えるのは彼女に対する侮辱だ。
これは、ただの自己満足。
『彼』と秘密を共有しているという、ささやかな優越感に浸りたいだけ。
秘密を共有する関係にある者。
それを人は『共犯者』と呼ぶ。
罪を犯した訳ではない。
誰かを騙したり、傷付けた訳でもない。
だけど、この言葉には、ちょっとした背徳感がある。

これは、ほんの小さな――少しだけ背徳的な出来事の話。

サイドストーリー #05

『ささやかな背徳感』

私がこの星に来て、今日でちょうど一週間になる。

この星――太陽系第三惑星・地球は、私にとっても遠い故郷に当たる。私の生まれ育った惑星ゼヘナの人間は地球人との混血で、私の住む東方大陸はここ、『ニホン』に色濃く影響を受けた土地だ。実際、私のツバキという名前も、この国で見られる常緑樹の『椿（つばき）』から取られている。椿というのは厳密には木の名前で、赤い花を咲かせるらしい。

『らしい』というのは、私は実際に椿の花を見た事がないからだ。地球人が持ち込んだ種子により、一時期はゼヘナでも見られたらしいが、環境が合わなかったためか、現在はデータでしか見る事は叶わない。

不慮の事態とはいえ、地球――しかもニホンに来たのだから、自分の名前の由来になった花の実物を見てみたい。そう思い、今日は〈カタストロ〉の探索を兼ねて、近場の商店街に出向いていた。

探索と言えば聞こえはいいが、今日のは実質、散策と言っていい。

昨日――地球の暦で言うなら火曜日に〈カタストロ〉の端末と遭遇戦になったが、あんな偶然はもう起きないだろう。起きたとすれば、それは『偶然』ではなく『待ち伏せ』だ。

ともあれ、遭遇戦になった事とは関係ないが、やみひめさんとの間に出来た気まずい雰囲気が解消された事で、今日の私は少しだけ浮かれていた。だから、不謹慎と言われる事を覚悟で、こうして散策気分で商店街を歩いている。

（――人間の営みというのは、住む星が違っても変わらぬものなのだな）

一応は〈カタストロ〉の探索という名目なので、周囲に気を配りながら歩いていると、そんな『声』が聞こえた。空気の振動を利用せず、直接（ちょくせつ）心に語りかけてくるそれは『念話』――いわゆるテレパシーだ。送り主は私の胸元にある黒い勾玉（まがたま）。待機状態の私のパートナーである、MBデバイスの〈カグツチ〉である。〈機獣少女〉とMBデバイスの間には不可視の経路（パス）が形成され、口に出さなくても会話が可能になる。こうも周囲に人がいる状況で、〈カグツチ〉の機械音声（マシン・ヴォイス）は目立つだろうし、そうでなくとも、ぶつぶつと独り言を呟きながら歩けば――そうとしか見えないだろう――好奇の視線を向けられる。

（この国の文化や人種は、東方大陸のそれと驚くほどに似ています。変わらないように見えるのは、そのためもあるのでしょう）

（そういえば、東方大陸人の源流（ルーツ）は、この国の出身者が多かったそうだな。期せずして、其方（そなた）にとっては里帰りになった訳だ）

〈カグツチ〉も私と同じような事を感じていたらしい。いつもの時代がかった口調には、

そこはかとなく感慨のようなものが滲んでいる。ひょっとしたら、彼女もこの国の風景に感じるものがあるのかもしれない。

（そうですね。迎えてくれる親戚も友人もいないのは残念ですが）

（確かにな。帰る場所も、知己もいないというのは、さびしいものかもしれん）

〈カグツチ〉は自分に関する記憶――すなわち、機獣だった頃の事を覚えていない。だから、今回のような里帰りをする私の気持ちが判らないため、微妙に言葉を濁した。

（でも、ここに来て良かった事もあります。素敵な友人が出来ました）

流遠（るとお）やみひめ。

一つ年上の、優しくて強い少女。彼女に出会わなければ、私は途方に暮れていただろう。

（それに、〈カグツチ〉――貴女（あなた）が一緒で助かりました。私だけだったら、きっと、どうしようもなかったと思います）

ＭＢデバイスは〈機獣少女〉の武器でありパートナーだが、〈カグツチ〉は私にとって友人であり保護者みたいな存在と言っていい。日常生活でも私の至らない部分をフォローしてくれるのは、ＭＢデバイスの職務の範疇（はんちゅう）を越えている。

（感謝していますよ、〈カグツチ〉）

（……ふん。世辞は要らぬ）

私の謝辞に、〈カグツチ〉は居心地悪そうに答えた。これは照れ隠しだ。彼女はまっすぐな言葉に弱い。

（ふふ。貴女はツンデレですね）

（ん？　ツバキよ、『つんでれ』とは何だ？）

『ツンデレ』とは、広義では照れ隠しが下手な人を指す言葉で、私もニホンに来て知った。基本的には女性に対して使う言葉だが、〈カグツチ〉は一応『女性格』なので、用法としては間違っていないと思う。

（貴女みたいな人の事ですよ）

（それでは判らぬ。そもそも、私は人間ではないぞ）

そんな念話を交わしつつ散策を進めていると、見知った顔を見つけた。この国で私が知る人間など数えるほどもいない。やみひめさんと、その両親、そして――

「――ツバキ？」

「こんにちは、橘（たちばな）さん」

向こうも私に気付いたらしく、声を掛けてくれた。男性にしては長めの黒髪と、同じく黒い瞳をした少年。

彼は橘アサト。確か高校三年生だったと聞いている。

若者らしい覇気に乏しく、気怠(けだる)い雰囲気を身にまとっている点を除けば、見た目は普通の男子高校生。よく見れば、そこそこ整った容姿をしているのに、面倒くさそうな雰囲気が、周囲にそれを気付かせない。少なくとも、同年代の女子にモテているようには思えない。この国の少女の好みは判らないが、やみひめさんは例外だろう。

「……なあ。なんか失礼な事(こと)考えてないか？」

「まさか。やみひめさんの想い人で、私にも親切にしてくれる方に、失礼な事なんて考えませんよ」

何食わぬ顔で答えたが、橘さんの言葉に内心では驚いていた。昨日のやみひめさんとの事もあるし、私はこの国に来て、感情が表面に出るようになったのかもしれない。

「そうか。被害妄想だったな。悪い」

「いえ、気になさらないでください」

こんな歳の離れた子供が相手でも、素直に謝れる橘さんに好感を持ちながら、嘘をついた自分に対して罪悪感を感じてしまう。だから、私は話題を早々に変える事にした。

「今日は私服なんですね。駄目ですよ、学校をさぼっては」

月曜日にやみひめさんを自宅に送ってきた際は制服を着ていた。今日は平日なので、学校があるはずなのに、橘さんは私服で商店街を歩いている。そこからの推測だった。

「そういった支配から卒業したい年頃なんだよ」

『支配』ですか？　この国は民主主義で、表向きには国民は平等とされているはずですが……」

図書館で得たこの国の知識は間違っていた、それとも古いものだったのだろうか。もしくは、『支配』というのは何かに対する比喩表現かもしれない。

「あー……悪い。俺だって世代じゃないからな。今のはネタだから、忘れてくれ」

どうやら比喩表現の方だったらしい。私が真剣に『支配』の意味を考えていたためか、気まずそうに橘さんが言った。

「けど、君の言い方はずいぶんとアレだな。民主主義や平等なんて、まるで信じちゃいないみたいだ」

「あ……」

確かに、先の私の発言はそういう風に受け取られてもおかしくない。実際には、知識として知っているだけだから、ああいう言い方になったのだが。

「重ねて、悪い。余計なお世話だったな」

私はどんな表情をしていたのだろう。きっと、橘さんがそう言わざるを得なくなるような表情をしていたんだと思う。実際、私は民主主義も平等も信じていない。そういう人間

が世間からどう思われるかも知っている。

橘さんは、どう思っただろう。

子供のくせにとか、反社会的だとか、悪い方に捉えたかもしれない。

この歳でそんな風に考えてしまう感性を、哀れに思ったかもしれない。

どちらにしても、嫌だった。

「……橘さんは信じていますか？　民主主義とか、平等とか」

「いや、まったく」

なんとか会話を続けようと必死で絞り出した質問だったが、橘さんは驚くほどに逡巡なく即答した。

「別に欺瞞（ぎまん）とは言わない。建前上はそうなってるし、それでこの国は表面的には上手く回ってる。けど、俺が信じてるかどうかで言うならノーだ」

むしろ胡散臭（うさんくさ）いと思ってる――橘さんは、そう付け加えた。

「では、私が信じていないとしても、それを非難したり、軽蔑したりしないんですか……？」

「しないな。昔だったら危険思想とか言われたのかもしれんが」

橘さんの言葉に、ほっとしている自分がいた。どうやら私は、彼に悪い印象を持たれたくないらしい。

やみひめさんの想い人だからというのもある。

けど、もっと単純に……。

「そんな事より――」

何か興味を惹かれるものでもあったのか、橘さんが私から視線を外して言った。彼にとって、この話題は『そんな事』らしい。他人がどんな思想を持っていようが興味がないのかもしれない。

私としても、この話題を続けたいとは思っていなかったので、ちょうどよかった。

「ツバキは甘いもの、好きか？」

「はい。好きですよ」

「ちょうどいい――付き合ってくれ」

「はい？」

私がきょとんとしていると、橘さんは『ついてこい』と手招きをするので、それに従った。

●
●
●

「橘さん……私、こういう事は初めてで」
手にしたソレは熱を帯びていて、ほんのりと温かい。
「ほら、両手でちゃんと握らないと、零れるぞ。服が汚れたら、やみ子にバレるかもしれん」
おっかなびっくりの私をリードするように、橘さんは少し強引にソレを握らせた。彼の表情も興奮のためか上気していて、これまでとは少し印象が違う。
「皮の部分を焦って噛まないようにな。慌てると中身が飛び出すから」
私がソレを口に含むと、橘さんの声が上擦った。私ほどではなくても、彼も経験豊富という訳ではないらしい。
「久々だけど、やっぱり堪らんな」
「そうなんですか？」
意外という訳でもないが、この国の男性がどの程度の頻度でこうした行為をするのか知らないため、疑問を口にした。
「そんな頻繁に出来ると思うか？　俺、彼女とかいないし」
そうなんだ。よかったですね、やみひめさん。橘さんはフリーのようですよ。
「……はあ」
私が行為を再開すると、橘さんは恍惚とした吐息を漏らす。段々と私も勝手が判ってきたので、舐め取るように舌を這わせてみる。
「――ッ！？　ツバキ、ヤバい！」
「え……ふぁ！？」
橘さんが慌てたように声を上げた次の瞬間、私の口内は濃厚な味と香りに蹂躙されていた。慌てて口内で受け止めようとするが、その量は意外と多く、口から零れてしまった。
「うぅ～、ベタベタします……」
「だから気を付けろって言ったろ？　ほら、こっち向け」
言われた通りに橘さんの方を向くと、彼はポケットティッシュを取り出し、私の口から零れた白濁したモノを拭き取ってくれた。ハンカチの類を常備していない印象だったので、少し意外だ。
「やっぱり、いきなりはまずかったか」
「でも、すごくドキドキしました。それに私……この味、好きみたいです」
醜態を晒してしまったが、その価値はあったと思う。こんな体験は初めてだ。
「そっか。でも、まだ残ってるぞ」
「あ、そうですね」

残してはもったいない。改めて両手でソレを握り、私は再び口に含んだ。今度は失敗しないように、慎重に。

「慌てなくていいから、ゆっくり味わってくれ」

「はい……んぅ……」

私が行為に没頭すると、橘さんも無言になり、彼曰く『久々』らしいソレを堪能していた。

（……ツバキよ）

橘さんと鉢合わせしてからは無言だった〈カグツチ〉が、私にだけ聞こえるように念話を送ってきた。

（どうしたんです？　ひょっとして、〈カグツチ〉も欲しくなりましたか？）

私が冗談めかして言うと、〈カグツチ〉は押し黙ってしまった。それは図星を突かれたからではなく、言いたい事があるけど言いにくい――そんな雰囲気だった。

（本当にどうしたんですか？　何か心配事でも？）

（非常に言いづらいのだが……）

（はい）

（其方等の会話が――いやらしい）

……。

〈カグツチ〉が何を言っているのか判らない。

どういう意味だろう。私と橘さんは、ただ並んでクレープを食べているだけなのに。

出来たてで、ほんのり熱を帯びているクレープ生地の皮。濃厚で甘い生クリーム。他にもトッピングはあったが、初めてならスタンダードがオススメだと橘さんに言われて、生クリームたっぷりにしてもらった。

ただ、握り方の加減を間違えてしまい、たっぷりすぎた生クリームを押し出してしまったが……何かいやらしい要素があったかと問われると、考えても心当たりがない。

（どういう意味ですか？）

（……いや、すまぬ。私は疲れているのかもしれんな。しばらく自己診断状態に入るので、何かあれば叩き起こしてくれ）

私の疑問には答えず、〈カグツチ〉はそう言って眠りに入った。心なしか、自己嫌悪を感じているような口調だったが、どういう事かは、やはり判らない。

●
●
●

クレープを食べ終わると、そのまましばらく、ベンチに腰掛けたまま雑談を続けた。
「でも、どうして彼女がいないとクレープが食べられないんですか？」
橘さんは先ほど、クレープを食べるのは久々だと言っていた。その理由として『彼女とかいないし』と言っていたが、理由として繋がらなかった。
「あの『男子禁制』的な列に、男一人で並ぶ度胸はない」
橘さんが指すのは、先ほどクレープを買った移動屋台だ。一緒に列に並んだ時は物珍しさで気付かなかったが、列を成しているのは圧倒的に若い女性で、カップルはいるが、男性が一人で並んでいる様子はない。確かに、あそこに男性が一人で並ぶのは勇気が要るかもしれない。
「なるほど。でも、少し意外です。橘さんは、そういうのを気にしないと思っていました」
ファミレスだろうと定食屋だろうと、一人で堂々と入れるイメージだったから。
「いや、あそこに並ぶのはコンビニでエロ漫画を買うのとは訳が違うぞ。まるで別次元の難易度と言っていい」
「……コンビニでそういう雑誌は買えるんですね」
「しまった。あまりに巧みな誘導尋問に引っ掛かってしまった。ツバキは取り調べとか得意そうだな」
誘導などしていない。橘さんが勝手に語るに落ちただけ。
「別に橘さんの趣味をどうこう言うつもりはありません。でも、男性が難儀な事は判りました」
「寛大だな。ともかく、こうして久々にクレープが食えた。一緒に並んでくれて助かったよ。あの甘味……うん、堪（たま）らん」
橘さんは相当な甘党らしく、この道を通る度（たび）にクレープの屋台に想いを馳（は）せていたそうだ。それを聞くと、可愛いを通り越して、可哀そうに思える。
「そんなにお好きなら、やみひめさんを誘えばいいじゃないですか。喜んで付き合ってくれると思いますよ？」
「それはなんというか……癪（しゃく）だ」
複雑な表情をして橘さんはそう言った。
やはり男性は難儀だ。私にはよく判らない。
「私なら、その……癪じゃないんですか？」
どうして、こんな事を訊（き）いたのだろう。まるで、やみひめさんと張り合っているみたい

だ。

「なんでかな。俺にもよく判らん」

誤魔化された気はしなかった。本当に橘さんにも判らないのだと思う。

残念なような、ほっとしたような、不思議な気分。私は、どんな言葉を期待していたのだろう。

「――何かお礼しなきゃな」

「え……？」

ふと、橘さんがそんな事を言ったので、私は間の抜けた声を上げてしまった。

「クレープをごちそうしていただきました。美味しかったですから、もう充分です」

クレープの代金を払おうとしたが、付き合ってくれた礼だと言って、受け取ってもらえなかった。手持ちのお金は、やみひめさんのご両親から戴いたものなので、軽々しく使ってはいけない。なので、それはありがたかった。

それに、こんな風にクレープを買って、青空の下で食べたのは初めてで、すごく新鮮だった。だから、これ以上のお礼など必要ないし、やみひめさんに申し訳ない。

橘さんは、やみひめさんの想い人だから。

私がやみひめさんだったら、きっと嫉妬してしまうから。

「ツバキは謙虚だな」

その言葉には、感心よりも呆れのニュアンスが強く感じられた。

『上手い話には裏がある』と言いますから」

「そうだな。けど、『齧れる脛は齧っとけ』とも言うぞ」

「初めて聞く格言です」

「俺のモットーだ」

嗚呼、やはりこの人は――ダメ人間だ。

「……」

「ツバキ、その目で見られるのは精神的にくるものがある」

俺が悪かったから勘弁してくれ――そう言って頭を下げられては、これ以上、続ける訳にもいかない。

「別に、君に恩を売って、どうこうしようなんて思ってないぞ」

「すみません。先ほどのは言葉の綾です。そんな風に思っていません」

「そうか？　なら、いいんだが」

そう。ただ、謙虚と言われた事に対して、そんな事ないと言いたかっただけ。

「それより、もう少しお話しませんか？」

「ん？　そんな事でいいなら、いくらでも付き合うが」
本当にそんな事でいいのか？――橘さんの顔にはそう書いてある。
「はい。充分です」
それから、色々な話を聞いた。ちなみに、今日は橘さんの高校の創立記念日で、休校らしい。だから私服で商店街をぶらついていただけで、さぼっていた訳ではなかった。
やがて話題は、橘さんの主観を交えるものに移っていった。やみひめさんと話していても感じた事だが、やはりこの国は平和で、平和故（ゆえ）の歪みがあるように感じた。
命の危険を伴う争いがない事は好ましい。
けど、命の危険を伴わない争いというのは、ある意味でもっと恐ろしい。
世の中には、物理的な暴力よりも残酷なものがあって、死ぬよりもつらい事があるから。
だから自殺をする人間がいるのに、それを理解出来（でき）ない人間もまた存在する。
〈カグツチ〉が言っていたように、住む星が違っても人間の営みは変わらず、人間の本質も変わらないのだろう。
……いけない。地球に来てから、ネガティブな思考が増えた気がする。
この平和な国に住む人を『平和ボケ』と呼ぶなら、ゼヘナで〈機獣少女〉をしている私は『戦争ボケ』している。
どちらが良い訳でもない。ボケている時点で大差ない。
ただ、苛立つ。
平和ボケも戦争ボケもしないで済む世界はありえないのか――そんな風に思ってしまうから。
「……ツバキ？」
私の表情が曇った事に気付いたのか、橘さんが気遣うようにこちらを見ていた。
「あ、すみません……ぼーっとしてました。私がお話したいと頼んだのに、失礼ですよね」
それきり、私は黙り込んでしまった。取り繕うのは無理だった。
〈機獣少女〉であっても、〈難攻不落のツバキ〉なんて呼ばれていても、しょせんは子供で。
自分で思っているほど弱くはなくても、周囲が思っているほど強くもない。
……あれ？　私、なんでこんな所にいるんだろう？
なんだか訳が判らなくなってきた。
意識が思考の海に沈みそうになる。
いっそ、その方が楽になれる気がしてきた。
そんな風に考える事を放棄しようとした時だ。

ふいに――頭上に重みを感じた。

「――え……？」

重みの次に感じたのは、かすかな温かさ。

これは手のひらだ。

優しく頭を撫でられる感触。

いったい、どれくらいぶりだろう……いや、そういえば、つい最近感じたばかりだ。

あれは昨日の事。

やみひめさんに頭を撫でられた。

あの時は恥ずかしくて言えなかったけど、一つしか違わないやみひめさんが、お姉さんに見えた。

それを今は、橘さんにされている。

これは同性のやみひめさんにされるよりも……恥ずかしい。

――恥ずかしいです。

そんな言葉すら出ないくらいに恥ずかしい。

結局――私は声も出せずに、されるがままで、永劫とも感じられる時間を過ごした。

恥ずかしさで人間は死ねないのだと知った。

●　●　●

「――こんな辱めを受けたのは初めてです」

ひたすら頭を撫でられるという橘さんからの羞恥プレイに耐えきり、私は彼に対し、そっぽを向いていた。

理由は単純で、顔を見られたくなかったから。きっと緩んだ表情をしてしまっている。

「これは、やみひめさんに報告せざるを得ませんね。無遠慮に身体を撫で回されたと言ったら、どんな顔をするでしょう」

「いや、頭だけだろう」

「頭も身体の一部です。何も虚偽の報告はしていません」

明らかに誤解を招く事を判った上での確信犯だが、誤解だと判ってもらえないのであれば、それは彼の普段の行いのせいであり、自業自得だろう。

私は何も悪くない。

悪いのは、私をこんな風にした橘さんだから。

「……悪かったよ」

「そう思うのであれば、罰を受けてください。信賞必罰という言葉をご存じですか？」

そんな不毛としか言いようのない応酬をしばらく続けているうちに、私の溜飲（りゅういん）はだいぶ下がった――いや、元からそんなものはなかった。ただ単に、緩んでしまった表情を、普段通りに戻すまでの時間稼ぎだったのだから。

「……ふう。もう落ち着きました。先ほどまでの発言は冗談ですので、心配しないでください」

やみひめさんに報告などしない。私も当事者なのだから、対岸の火事とはいかない。わざわざ彼女との関係に亀裂を入れるのは、私だって嫌だ。

「それにしても……橘さんは年下の女の子の扱いが上手いんですね」

だけど、恥ずかしかったのは事実だから、これくらいの意趣返しは許してほしい。

「……微妙に誤解を招く言い方だな」

「ふふ、そうですね。本当は、お兄さんぽいなって言いたかったんです」

「……」

私の発言に、橘さんは以前にも見せた微妙な表情をした。日曜日に私の買い物に付き合ってくれた際、やみひめさんが彼を『お兄ちゃん』と呼び、私もそれに便乗して『兄さん』と呼んだ事があった。その時と同じ微妙な表情。

「先日もそうでしたが、どうして『お兄ちゃん』と呼ばれるのに抵抗があるんですか？」

ちょっとした疑問。やみひめさんも理由は知らないと言っていた。

「……楽しい話じゃないぞ？」

橘さんは微妙な表情のまま、声の調子（トーン）を少し落として言った。それでも聞きたいか、と。

私は『やみひめさんの親戚の子』で、いわば行（ゆ）きずりの人間だ。だから話してくれる気になったのだろうし、この機会を逃したら、気になって悶々としてしまう。私は少し躊躇（ためら）ったが、「はい」と答えた。

「――俺、妹がいるんだよ」

橘さんの第一声から、私は早くも後悔していた。これは軽々しく聞いていい話ではないと、彼の雰囲気から感じたからだ。

「三年前の夏に行方不明になって、それきりだけどな」

そう語る橘さんの声は普段通りで、それが逆に怖かった。それは、この話題が彼にとって、感情を高ぶらせなければ話せない時期を過ぎている事を意味している。

「当時は小学六年生だったから、今のやみ子と同じ頃だな。身代金なんかの要求はなくて、家出する理由なんて思いつかない。そうすると、誘拐そのものが目的の事件に巻き込まれたかなんかだろうな」

淡々と、理数系の授業の解説をする教師みたいに、橘さんの声には何の感情も滲(にじ)んでいない。本当にもう、悲しんだり怒ったりする時期は越えてしまったのだろう。そうでなかったら、私は冷静に話を聞けていなかったと思う。

当然だが、当時は大変な状況だったらしい。橘さんの母親は心を病み、今は実家で療養しており、父親もそちらについているらしい。だから今の家で、橘さんは一人暮らしという事になる。妹さんが帰って来た時、誰もいないとさびしいだろうと。

『お兄ちゃん』って呼ばれるとな、妹の事を思い出しちゃうんだよ。君達くらいの女の子が相手だと、特にな」

思いのほか中学校での成績は良く、高校には推薦で合格したが、まともに受験をしていたら高校生にはなっていなかっただろうと、橘さんは苦笑気味に語った。そして、妹さんの事件以降、暇が出来ると近所をぶらついたり、彼女が最後に目撃された公園に立ち寄るようになったらしい。

もしかしたら――そんな希望を抱えて。

「……」

私は何も言えなくなった。

何を言えばいいか判らなかった。

「な？　楽しい話じゃなかっただろ？」

責める訳でもなく、むしろ苦笑に近い口調で橘さんは私に言った。

「……すまん。やっぱり、聞かせるべきじゃなかった。困るよな、こんなの聞かされても」

でも、と彼は続けた。

「きっと、誰かに聞いてほしかったんだろうな……だから話したんだと思う」

今日の橘さんは口数が多い。それは重い話を聞かせた私への、罪の意識によるものだと思う。私は言葉が見つからなくて、彼が黙ってしまえば、気まずい沈黙が訪れてしまうから。

「本当にすまない。俺が勝手に――」

「橘さん」

私は橘さんの言葉を遮(さえぎ)った。これ以上、彼に謝らせるのは申し訳なかったし、何より、

私が居たたまれない。

話したのは彼の判断でも、訊(き)いたのは私だから、非は両方にある。

「無神経な事を訊いてしまい、すみませんでした。でも、話した橘さんが悪いというなら、もう謝りません。だから橘さんも、もう謝らないでください。それ以上、謝られると……私がつらいです」

本当につらいのは、橘さんの方のはずだから。

「……そうだな。すまん」

「謝らないでと言いましたよ」

「ああ、すま――」

「……」

「なんでもない」

「結構です」

私の気取った言い方か、年下の女の子に主導権を握られている事か、恐らく両方がおかしくなったのだと思う。橘さんが苦笑し、私もつられて、控えめに笑った。

●
●
●

「――さて、そろそろ行くわ。もう一人の妹が公園に来る頃だから」

あれから少しずつ調子を取り戻して、気付けば普通に会話が出来るようになった頃、橘さんは腕時計の時間を確認して立ち上がった。

『あの話題は気にするな』という意味なのか、あえて『妹』という言葉を彼は使った。なんとなく、私も妹の範疇に含められているような気がしたが、確認するのは野暮な気がした。

だから――

「はい、いってらっしゃい――兄さん」

と、ちょっとした悪戯(いたずら)心を抑えきれずに、彼をそう呼んだ。

彼はやはり微妙な表情をしていたが、私は気付いていない風を装った。

「ツバキは意外といい性格してるな」

橘さんは機嫌を損ねるでもなく、私の発言に苦笑していた。

「私、結構、図太いんですよ？」

「その方がいい。生きてくのに向いてる」

そう言って、「じゃあ、またな」と踵(きびす)を返す彼の背中を呼び止めた。

「今日の事、やみひめさんには秘密にしてもらっていいですか」
「そうだな。いつか話す時が来るかもしれんが、今じゃなくていいだろうし」
「それもありますけど、ここで私と会った事自体です。やみひめさんに嫉妬されたくありませんから」
「……確かに、面倒な事になりそうだしな。判った、そうする」
その会話を最後に、橘さんとは別れた。彼の背中が見えなくなるまで見送って、残りの時間をどうしようか考えていると、自己診断状態（スリープ・モード）から起動していたらしい〈カグツチ〉が機械音声（マシン・ヴォイス）を発した。会話が聞こえるような距離には誰もいないという配慮のもとだろう。
『――『やみひめに嫉妬されたくない』というのは本心か？』
「開口一番にそれですか？　いつから目覚めていたんです？」
『質問に質問で返すでない。ちなみに、最初から眠ってなどおらなんだよ』
「やっぱり。すべて聞いていたんですね」
〈カグツチ〉は好奇心が強い。自分に関する記憶を失っているため、他の知識や情報で空白を埋めたいという気持ちがあるのかもしれない。
『むぅ……すまん』
私の口調が呆れていたからか、律儀なパートナーは謝罪の言葉を口にした。
「別に聞かれて困る話はしていませんから、気にしていません。でも、今日の事は他言無用ですよ？」
もっとも、他言する相手など、ここでは一人しかいないのだが。
『承知している。しかし、ツバキと会った事も話すなと言う必要はあったのか？』
「言いましたよ、橘さんと二人きりで会った事を知られて、やみひめさんに嫉妬されたくないから、と。先ほどの質問に答えるなら、ええ、本心ですよ」
『……さようか。ならばよい』

私はこの時、少しだけ嘘を吐いた。
本当は、彼と共有出来る秘密が欲しかったのだと思う。
友人の想い人との、ちょっとした秘め事の思い出。
何も色っぽい事などなかったし、やましい事もしていない。
でも、やみひめさんに対して秘密が出来た事が、申し訳なさと優越感から、二律背反する感情を私の中に芽生えさせる。
それはきっと、ささやかな背徳感。
確かに私は、いい性格をしているかもしれない。

『では、これからどうする。『椿（つばき）』を探しに花屋を回るか？』

〈カグツチ〉の言葉で思い出す。今日は探索はついでで、私の名前の花を見るのが目的だった。

「そうですね。そうしましょう」

本来の目的を達成するため、私は橘さんが向かった方向とは逆に向かって足を進めた。その方向に花屋があると確信があった訳ではないが、彼と同じ方向に向かうのは、なぜか躊躇われたからだ。

ちなみに、花屋は何件か見つけたが、その日に椿を見る事は叶わなかった。

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『ゾイやみ』サイドストーリー＃05をお届け致します。

サイドストーリーも五本目というキリの良い数になりました。今回はツバキ視点で、彼女の話としては二度目となります。＃02『私の戦う理由』もそうでしたが、ツバキはこのシリーズにおけるシリアス担当というか、重い部分を背負わせている感があります。『ゾイやみ』では主人公を普通の女の子に設定したので、その皺寄（しわよ）せというか、著者の鬱屈した部分の捌（は）け口にされているというか……ツバキ、ごめん。

念のため書いておくと、今回の話が本編・第九話でツバキが秘密と言っていた内容です。アサトがどうして公園に入り浸っていたのかについては劇中の通りで、ちゃんと理由がありました。何も考えていなかった訳ではありませんとも、ええ……ほ、本当なんだからねッ！？

では、無駄にツンデレったところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

本編は後半戦に入りましたが、年内に終われるかどうかは神のミソスープ――もとい、神のみぞ知るです。

……つまんない事を言ってしまいました。疲れてるのね。

だって、今は更新予定日当日の夕方なんですもの。

２０１５／６／30　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る